

令和8年3月2日

令和7年度とうきょう すくわくプログラム推進事業 活動報告書

園名	墨田区立柳島幼稚園
所在地	墨田区横川5-2-30

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「描く・つくる ～“自分らしく”から“協同”へ～」

<テーマの設定理由>

感じたことや考えたことを様々な方法で表現する活動は、幼児の豊かな感性や創造性を育むだけでなく、自己肯定感や自信を育み、他者との中で自己発揮する幼児を育てると考える。本園では今年度「互いのよさを生かし、協同して遊ぶ幼児を育てる」というテーマで研究に取り組んでいる。創作活動の充実を図り、一人一人の自己実現と、協同して遊ぶ楽しさを支えていきたい。

2. 活動スケジュール

年間を通して 個人製作「描きたい、創りたい」（自ら選ぶ遊び） ★事例①
10月 「動物をつくろう」（移動動物園の経験から） ★事例②
11月 「遊園地をつくろう」（遊園地遠足の経験から） ★事例③
11月22日 作品展開催 11月29日（土）小学校展覧会への出展
12月12日 遊園地ごっこ開催

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

全体を通して “子どもの「描きたい」、「つくりたい」が実現できる環境づくり”

- ・様々な画材や素材等を設定し、自分（たち）でイメージ合ったものを選び取ることができる環境
- ・室内、園庭でも描いたり作ったりできる環境 ★画材セットの設定、イーゼルの活用
- ・本物らしく表現するための素材や道具 ★ハンスコープ 等
- ・絵本や写真、ドキュメンテーション等の視覚教材 ・作品を見合える「みてみてコーナー」の設定



製作コーナー



イーゼル



画材セットの設定



本物らしく表現するための道具



4. 探究活動の実績

<活動の内容>

- ・個人製作「描きたい、つくりたい」（自ら選ぶ遊び） ★事例①
- ・共同製作「動物をつくろう」（移動動物園の経験から） ★事例②
- ・共同製作「遊園地をつくろう」（遊園地遠足の経験から）
- ・作品展、小学校展覧会出展、遊園地ごっこ

<活動中の子供たちの姿・声、子供同士や子供と保育者との関わり>

事例① 個人製作「描きたい、つくりたい」

製作が大好きな幼児が多く、自ら選ぶ遊びになると、製作コーナーに集まり、遊びに必要なものや、イメージしたことを表現して遊んでいた。様々な素材や用具に触れられるように、製作棚を整えたり、教員も積極的に提案や提示をしつたりしながら、遊びの中で「触れる」、「特性を知る」、「使ってつくる」経験を重ねてきた。でき上がった作品を飾る場の設定、作品紹介タイム、ドキュメンテーションの掲示等、見たり聞いたりする中で自分や友達の工夫に触れられるようにした。友達や教員に認めてもらうと、更に意欲を高め、「次は、もっとこーしたい。」と目的をもち、つくって遊ぶ姿が見られた。また、「どうやってつくるの?」と友達に聞いたり、考えを出し合いながら協力してつくったりする姿も見られるようになった。

自然豊かな秋になると、戸外で遊びたい気持ちが高まるため、教員は製作コーナーや描画コーナーを園庭に配置した。ハンスコープを持って園庭を探検する→細部まで観察する→描く(イーゼル)・遊びに使う姿が見られ、秋ならではの表現活動を楽しむ経験となった。

11月には園内で作品展を開催し、幼児の「描きたい、つくりたい」の作品を保護者や地域の方に公開した。また、併設の小学校の展覧会に幼稚園ブースとして出展し、小学生や小学校教員にも見もらった。自分たちの工夫や頑張りも認めてもらう機会となり、満足感や充実感につながった。

事例② 共同製作「動物をつくろう」

移動動物園を実施し、モルモットやヒヨコ等の小動物や、ヒツジ等の動物と実際にふれあう体験をした。「小さくてかわいいね」、「ふわふわの白い毛だ」、「ひげがある」等、動物の体の大きさや色、形、触り心地を言葉にしなが、ふれあいを楽しむ姿が見られた。

翌日、製作コーナーに動物を再現できるような素材や道具の設定、動物園の様子を思い出せるような写真やドキュメンテーションの掲示をしておいた。自ら選ぶ遊びになると、材料を選び、自分なりに動物を再現することを楽しんでいた。

数日後、大きい動物がヒツジしかいないことに気付いた幼児が、「ヒツジの友達をつくってあげようよ」と学級で提案し、グループに分かれて共同製作をすることになった。グループの友達と一緒に、図鑑やタブレット端末を見ながら動物を決めたり、完成図を描き、使う素材や道具を相談したりし、自分たちの考えた動物を表現した。ヒツジの隣に飾ると、満足そうに友達と顔を見合わせて喜んだ。

<活動の様子>

事例①



事例②



5. 振り返り

(振り返りによって得た保育者の気づき)

幼児の創作活動を振り返る中で、次のことが分かった。

- ・素材や用具と出会い、自分なりの関わりを十分楽しむ中で、特性を理解し、使いこなせるようになる。ものに関わる時間や機会の保障や、幼児の発達や実態に応じて、適した教材や技法等を見極めることが大切である。
- ・少し頑張ったらできる、本物らしくできるという要素も幼児の創作意欲を高める。
- ・「楽しい」、「面白い」、「不思議だ」等の心の動きが大きいほど、つくりたい気持ちが大きくなる。
- ・創作活動では、イメージの広がりを支える刺激（ものや人）や個々の「つくりたい」を支える教員の存在がとても重要である。
- ・共同製作では目的やイメージの可視化がとても有効である。

本プログラムにより、創作活動における素材や用具を豊富に提示することができ、幼児の経験や表現方法の広がり、技能面の高まりにつながったことは確かである。創作活動に取り組む中で、幼児の心が動く体験の充実が大切であること、そして、いろいろなモノを「知っている」、「使える」という自信が「表現してみよう」、「工夫してみよう」という意欲になり、そしてそのために「じっくり観察する」、「調べる」、「試行錯誤する」という探求する姿につながっていくことが分かった。

以上